

語り継ぐ、戦争の記憶 つなぐ、平和な未来へ。

芦屋市では、昭和20(1945)年5月11日に初めて空襲を受け、同年8月5日深夜から6日未明にかけての阪神大空襲では、多くの尊い命が失われ、市民の半数が被害を受けました。

今回は、戦時中にこども時代を芦屋市で過ごした方々に、空襲の恐怖や疎開先での暮らし、戦時下の日常についてお話を伺いました。時が流れ、戦争を直接知る人が少なくなる今だからこそ、その記憶を次の世代へ伝えていくために、当時の暮らしや思いが伝わるエピソードをご紹介します。

問い合わせ 人権・男女共生課 ☎38-2055

しょういだん

焼夷弾で全焼した我が家

堀内 幸子さん

私が通っていた小学校はもともと白い校舎でしたが、B-29に見つかりやすいからと、途中で目立たないように緑色に塗り替えられました。

わら草履が配給されたこともありましたが、全員分は用意されず、同級生とじゃんけんで取り合ったのを覚えています。学校には通っていましたが、警戒警報が鳴ると勉強どころではなくなり、家に帰るしかありませんでした。私が空襲を経験したのは、小学3年生、8歳の頃でした。5月の空襲では、爆弾による大きな穴があちこちできていて、壁には破片が刺さっていました。家の中では押入れの物が爆



風で飛び出し、家が倒れなかったのが不思議でした。また、8月の空襲では、防空壕に入った直後、我が家に焼夷弾が無数に落とされ、道路に逃げ出したところ、向かいのドイツ人の方が石造のガレージに入れてくださり命拾いをしました。夜が明け外に出ると、住み慣れた我が家は跡形もなく焼け落ち、石造の蔵だけが残りました。焼け跡には多数の焼夷弾の筒が残っており、蔵も屋根を突き破った焼夷弾で中は煤(すす)で真っ黒になっていましたが、残った道具は今でもお正月などに使っています。



山手小学校校舎の擬装

幼い記憶に残る空襲と終戦の日

渡邊 徹也さん

私が空襲を経験したのは5歳の頃です。幼稚園には1学期までは通えましたが、2学期からは園舎が戦争の倉庫になってしまい、行けなくなりました。家の窓には黒いカーテンが掛けられ、電灯の傘に黒い覆いが付けられていました。光が漏れて爆撃機に見つからないよう、できるだけ明かりを漏らさないようにしていました。8月6日の空襲では、焼夷弾の



ピアノの根元に刺さった破片が作った三角形のへこみ(幅約1センチ)

部品が2階の大屋根に落下し、中央部が一部損傷しました。庭に面した座敷のガラス戸が割れ、廊下にガラスの破片が散乱しました。さらに東西に面した表門と、路を挟んだ倉庫が燃え上がり、火の粉が自宅の表門に飛び火して全焼しました。また、門と中門の間の木材の塀

にも延焼しましたが、両親が消止めました。玄関土間の奥に置かれていた縦型ピアノの根元には、焼夷弾の破片が突き刺さっていました。焼夷弾の破片は、庭に面した座敷にも多く見られました。終戦の日は、親が終戦の放送を聞きに行っていたのを覚えています。前もって、何か大切な放送があるということを、大人たちは知っていたようでした。当時の私は幼かったので、はっきりとした意味まではわかりませんでしたが、あの空気は今でも印象に残っています。終戦から81年が経ちましたが、現代においても、世界では戦争や紛争が続いています。武力ではなく、言葉の力で解決できないものかと、いつも思っています。



空襲と疎開、焼けかけた家の記憶

丘 博通さん

3歳くらいの頃、各都市での空襲が激しくなったので、親類を頼り母に連れられて長野県へ縁故疎開しました。こどもながらに、自分たちで自発的に疎開するのだということは、なんとなくわかっていたように思います。

母は芦屋に戻ってからも、時々私のようなすを見に来てくれましたが、当時の状況では切符を取るだけでも大変だったはずで



すの方から、お金ではなく着物や装飾品と引き換えに、食べ物を分けていただいたこともありました。戦後、芦屋に帰ってくると、焼夷弾で物置が焼け、消火活動をしたため家中が泥んこになっていました。住宅が密集しており、火がつくとみるみる燃え広がってしまうため、井戸から水を汲んで、バケツ

リレーで消火活動をしたと聞いています。セメントで固めた防火用水も、道沿いに作ってありました。バスタブくらいの大きさで、1メートルほどの高さがあったと思います。防空壕は近所の人と協力して、2～3日くらいかけて掘っていました。体を縮めて入るのがやっとでした。それでも、いざという時のために必要な場所だったのだと思います。焼夷弾が防空壕を突き抜けて、中にいた人たちが全滅したという話も聞き、戦争の恐ろしさを改めて感じました。



防空訓練(東芦屋町)